

フリーター「選択」と生育家族の階層的背景

——「高校生の生活と進路意識調査」から(2)——

妻木 進吾

要約

大阪府の高校三年生を対象とした質問紙調査の結果から、高卒時における進路分化(進学/就職/フリーター)とそこへ至るプロセスについて、生育家族の階層的背景(文化階層)を切り口に検討した。相対的に低い文化階層上の位置にある者は、小学校段階からの周辺化されがちな学校生活などを経て、進学しない/できないことよって、フリーターとして析出されがちであることを明らかにした。

はじめに

二〇〇三年、被差別部落の若者二六人を含む四〇人の若者を対象に行われた生活史聞き取り調査、「大阪フリーター調査」では、不利が不利を呼ぶ形で、生育家族における様々な困難が、低学力や低学歴など、そこで生まれ育った若者自身の困難へと変換/移転され、不安定就

労層としてのフリーターへと押し出されていく、そうした若者の姿が描きだされた。社会的不平等の世代間再生産としてフリーター析出プロセスが描き出されたのである(妻木二〇〇五)。

「高校生の生活と進路意識調査」(高校生調査)の結果から、高校卒業時における進路分化を検討するシリーズの第二回目である本稿は、高校三年時(一二一月時点)における「進学」「就職」「フリーター」という進路分化

（予定進路の分化）、そして、そこへと至るプロセスを、生育家族の階層的側面から、時系列的に記述していく。もって、低い社会階層的背景を持った若者がよりフリーターとして析出されやすいという、「大阪フリーター調査」で得られた知見を量的に確認することを旨とする。

用いるデータは、大阪府の公立高校一二校の協力を得て、各学校の高校三年生を対象として実施した「高校生調査」から得られたものである。調査は二〇〇四年一月から〇五年一月にかけて、ホームルームあるいは選択授業の時間などを利用して、質問紙を用いた集合自記式により実施した。最終的な有効回答票は一四〇九票であった。詳細は、調査報告書（部落解放・人権研究所二〇〇六）を参照されたい。

一 文化階層

調査対象となった高校三年生の若者たちは、どのような家族に生まれ育ったのか。本稿では、以下に述べる「文化階層」を中心に議論を進めていく。ここで「文化階層」とは、荻谷（二〇〇四）等にならない、作成された階層指標を意味している。すなわち、「家の人はテレビでニュースを見る」「家の人が手づくりのお菓子をつくってく

れる」「小さいときに、家の人に絵本を読んでもらった」「家の人に博物館や美術館に連れて行ってもらったことがある」の評定四段階（とてもあてはまる）～「あてはまらない」にそれぞれ四点～一点、「家にパソコンがある」の「はい」に四点、「いいえ」に一点を割り振り、以上の合計得点を「文化階層得点」とし、さらに、その得点によって、各グループの人数ができるだけ近くなるように、「上位」（四六四人）、「中位」（五一八人）、「下位」（三九二人）の三グループに分けたものである。

以下、この文化階層によって表される生育家族の階層的背景が、小・中・高校の各段階、そして高校三年生時の進路分化にもたらす影響について記述していくのだが、その前に、文化階層上位・中位・下位とはいかなる内実をもっているのか、それぞれのプロフィールを、文化階層変数の作成に用いた項目も含めて示しておく。

文化階層上位グループでは、ほぼ全員（一〇割弱）が小さい頃に、家の人に絵本を読んでもらった。家の人に博物館や美術館に連れて行ってもらった経験も大多数（九割弱）が持っている。過半数（五割強）は家の人が手づくりのお菓子を作ってくれました。また、ほぼ全員の家にはパソコンがある。生家の経済的豊かさについては、六割強が「ゆとりがある」と回答している。過半数は「家

の人」が大学を出ており、大多数（九割弱）に大学生・大卒の親戚がいる。「スーツ姿で働くサラリーマン」（七割）、「専業主婦」（七割）も家族・親戚など身近に存在し、「医者・弁護士・先生」（三割強）が家族・親戚にいる者も多い。また、生まれ育った地域には、「サラリーマン」（七割）、「専業主婦」（七割）、「大学生・大卒者」（七割）が身近にいた。

対して文化階層下位グループでは、家の人に絵本を読んでもらった者は四割である。家の人に博物館や美術館に連れて行ってもらった者や、家の人が手づくりのお菓子をつくってくれたという者はそれぞれ一割程度に過ぎない。家にパソコンがある割合も四割に満たない。生家の経済的豊かさについて「ゆとりがある」と回答する割合は五割に満たない。「家の人が大学を出ている」者は二割に満たない。家族・親族にまで拡げても大学生・大卒者がいる者は六割程度である。家族・親戚に「スーツ姿で働くサラリーマン」（四割強）、「専業主婦」（六割）、「医者・弁護士・先生」（二割弱）がいる割合は低く、「シングルマザー」「フリーター」がいる割合は上位グループに比べやや高い。また、生まれ育った地域に、「サラリーマン」「専業主婦」「大学生・大卒者」がいる割合はそれぞれ五割程度と上位グループに比べ低い。

文化階層中位の生育家族は、この上位と下位の間に位置づく。

文化階層によって表される生育家族の階層的背景は、小・中・高校の各段階、そして高校三年生時の進路分化にいかなる影響をもたらすのか。

二 文化階層と小・中学校生活

1 小学校生活

生育家族の階層的背景によって、小学校での生活は異なったものとして経験されている。図1、2は、文化階層と小学校時の授業内容理解、信頼できる教師の有無との関係を表している。

「授業内容を理解していた」（とてもあてはまる）「まああてはまる」割合は、上位七五・五％▽中位七一・三％▽下位六四・一％、「信頼できる教師がいた」（同）割合は、上位六五・二％▽中位五九・〇％▽下位五一・四％と、いずれも下位グループほど低くなっている。

小学校という早い段階から、文化階層上の位置に対応した授業内容理解の差が（そして恐らくは学力差も）生じている。さらに、「信頼できる教師」の存在にも文化階

図1 文化階層と小学生時「授業内容を理解していた」

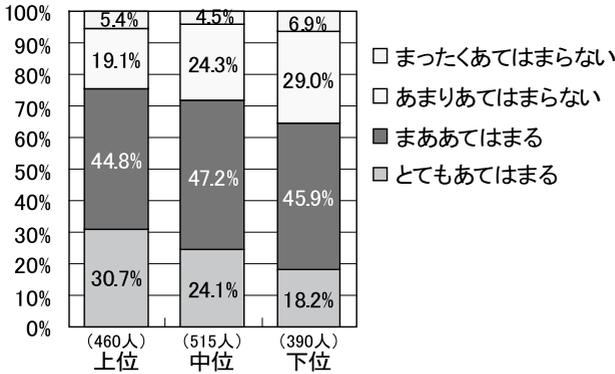
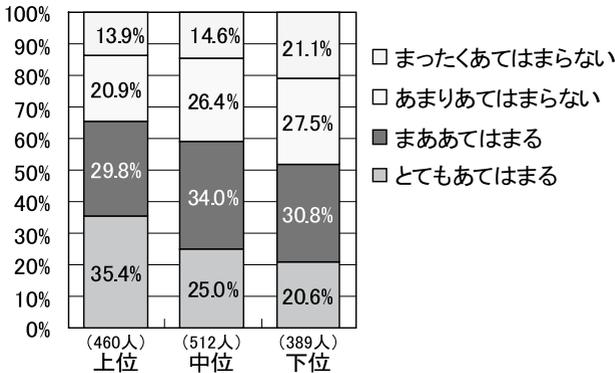


図2 文化階層と小学生時「信頼できる教師がいた」



層による差異が見られる。「信頼できる教師」に関する文化階層による差異は、学校・教師が低階層の子どもの成功を阻害する不平等の再生産の担い手となっているという先行研究の指摘を踏まえれば、教師の処遇の違いか

ら生じているのではないかと考えられる。いずれにせよ、相対的に低い文化階層の背景を持つ層が、小学校段階で既に周辺化されがちな傾向が見いだされるのである。

2 中学校生活と将来展望

小学校時に見られた傾向は、中学校時代になっても引き続き見られる(図3、4)。

「授業内容を理解していた」(とてもあてはまる)「まああてはまる」割合は、上位五六・三%▽中位五三・二%▽下位四〇・七%、「信頼できる教師がいた」(とてもあてはまる)「まああてはまる」割合は、上位六〇・九%▽中位五八・七%▽下位五〇・六%と、いずれも下位グループほど低くなっている。文化階層上の位置に対応した授業内容理解の差、下位グループほど顕著に見られる信頼できる教師の不在という、学校における周辺化傾向は、中学になっても継続している。「授業内容を理解していた」割合の上位・下位グループ間の差について見ると、

図3 文化階層と中学生時「授業内容を理解していた」

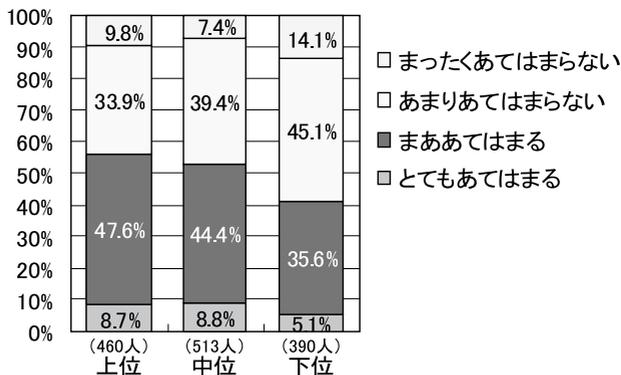
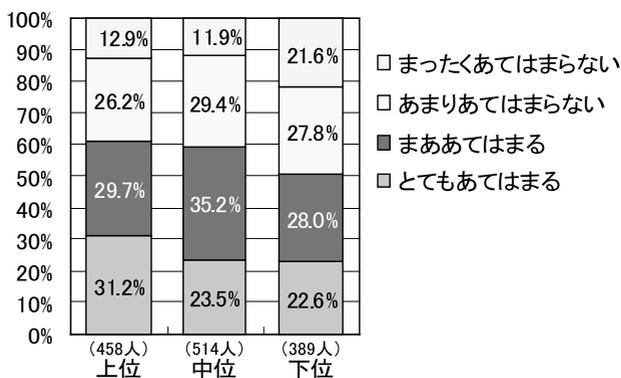


図4 文化階層と中学生時「信頼できる教師がいた」



小学校時代にはその差は一六ポイントであったが、中学校時になると一六ポイントと大きくなっている。この五ポイントの差を大きいと見るか小さいと見るかはともかくとして、少なくとも授業内容理解の差は縮小していな

な差異が生じているのである。こうした文化階層による進路希望(将来展望)の違いは、(文化階層↓学力↓進路希望)という形で学力(授業内容理解)を媒介してもたらされているだけでなく、

いのであり、小学校・中学校が、「社会の平等化の装置」ではなく「不平等の再生産装置」としての機能を果たしてしまっている実態をここに見ることができている。

中学時点までに生じるのは、このような文化階層上の位置に対応した授業内容理解の差だけではない。図5は、「中学生の頃、高校を卒業したらどのような進路に進みたいと思っていましたか」と尋ねた結果を表している。

大学・短大に進学しようと考えていた割合は、上位四〇・一%▽中位三三・三%▽下位二〇・九%と下位グループほど低く、就職しようと考えていた割合は上位一四・三%△中位二七・二%△下位三〇・五%と下位グループほど高くなっている。少なくとも中学時点で、生育家族の階層的背景によって、将来展望に大き

図5 文化階層と中学時代の高卒後進路希望

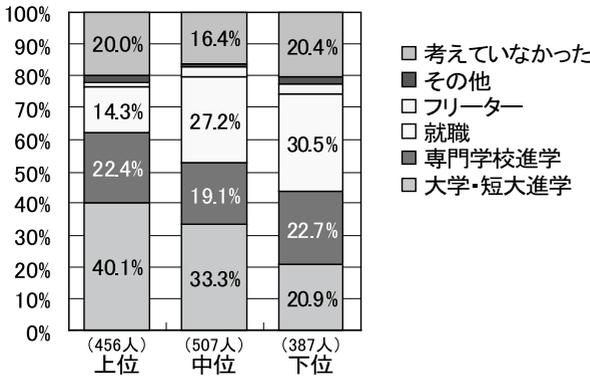
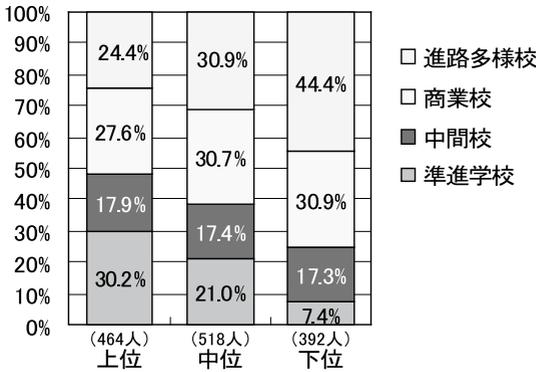


図6 文化階層と高校タイプ



〈文化階層↓将来展望〉という形で直接に影響を及ぼしている。中学時代の授業内容理解度別に文化階層と「中学時点での高卒後希望進路」との関係を見ると、授業内容理解度が最も高い層（「とてもあてはまる」）を除く三層ではいずれにおいても、大学・短大進学希望割合は文

化階層上位グループほど高く、就職希望は下位グループほど高い傾向が見られる（紙幅の都合で表は略す）。授業内容理解度（学力）が同程度であっても、文化階層が下位の生徒は就職を希望しがちであり、文化階層が上位の生徒は大学・短大への進学を希望しがちなのである。

三 文化階層と高校生活

1 進学する高校タイプ

小学校・中学校における授業内容理解度の低さ（「低学力」）、そして将来展望は、どのようなタイプの高校に入学できるか／するかを強く規定することになる（図6）。

調査対象者が在学中の高校のタイプを「準進学校」（受験偏差値五〇台半ば）、「中間校」（同四〇台半ば）、「商業校」（同四〇台）、「進路多様校」（同三〇台）に分けると、「準進学校」の割合は上位三〇・二％▽中位二一・〇％▽下位七・四％と文化階層上位グループほど高く、「進路

図7 文化階層と高校生時「授業内容を理解していた」

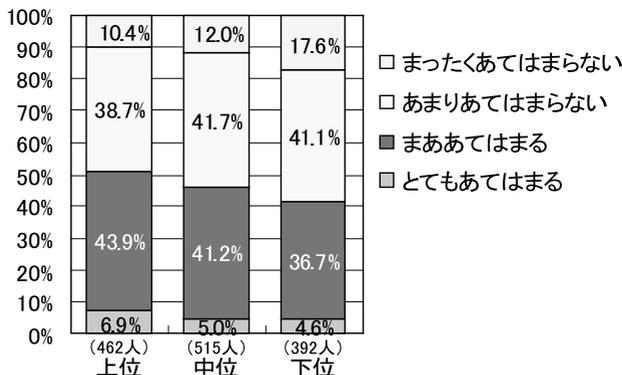
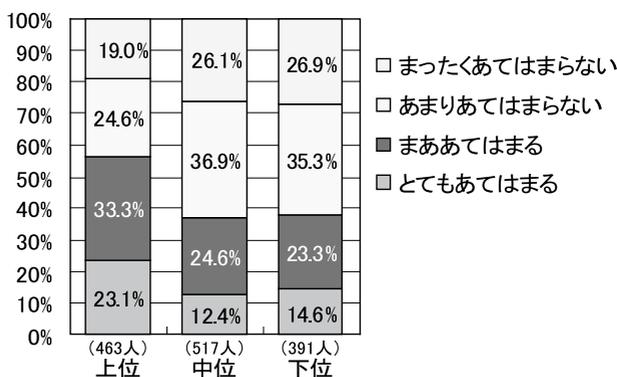


図8 文化階層と高校生時「信頼できる教師がいた」



多様校」の割合は上位二四・四％、中位三〇・九％、下位四四・四％と下位グループほど高い。生育家族の文化階層上の位置に対応した授業内容理解の差（そして恐らくは学力差）は、小学校時の段階には

「授業内容を理解していた」（「とてもあてはまる」「まあ

か、信頼できる教師の不在も含め、文化階層下位グループが学校において周辺化されがちである傾向は高校においても継続している（図7、8）。

生じており、中学時においても継続していく。中学時の将来展望にも文化階層上の位置に対応した差異が見られる。このような小・中学校時代を経て、彼／彼女は、文化階層上の位置に対応したタイプの高校へと割り振られてしまう／あるいは選択していくのである。

2 高校生活・授業内容理解と信頼できる教師

どのようなタイプの高校に進学できるか／するかは、学力による選抜を經由しているのであるから、対象者が在学している高校の授業内容はそれぞれの中学時代の学力におよそ対応したものとなっているはずである。であるなら、高校における授業内容理解に、文化階層による差異はなくなっても不思議はない。し

あてはまる」割合は、上位五〇・八%∨中位四六・二%∨下位四一・三%、「信頼できる教師がいた」(同)割合は、上位五六・四%∨中位三七・〇%・下位三七・九%と、いずれも下位グループほど低くなっているのである。

3 「学校的価値」への同調と逸脱

高校生活において文化階層により差が見られるのは、授業内容理解や信頼できる教師の有無だけではない。文化階層によって高校生活のありようは異なったものとなっている。

文化階層と、「高校生活全体を通して、熱心に取り組んだこと」を複数選択で尋ねた結果との関係を見ると、「学校でのクラブ活動」を選択する割合は上位四六・九%∨中位三七・一%∨下位二五・九%、「学校行事」の割合は上位四九・二%∨中位四三・二%∨下位三六・七%と、上位グループほど高くなっている。一方、「アルバイト」の割合は、上位三六・九%∨中位四一・一%∨下位五三・八%と、下位グループほど高くなっている。

文化階層下位グループをアルバイトという「学校外の活動」へと向かわせる要因の一つに、文化階層と結びつく生育家族の経済状況がある。「アルバイトをはじめた理由は何ですか」と複数選択で尋ねた結果を見ると、「社

会経験をしたかったから」を選択する割合は、上位三八・七%・中位三七・七%∨下位二六・八%、「やりたい内容の仕事があったから」の割合も、上位九・五%∨中位七・二%∨下位四・四%と、いずれも上位グループで高くなっている。一方、「家計を助けるため」の割合は、上位一八・四%・中位一八・一%∨下位二六・八%と下位グループで高くなっている。「社会経験」や「やりたい仕事」としてアルバイトを始める上位グループに対して、下位グループにおいては、「家計を助けるため」という、半ばやらざるを得ないものとしてアルバイトが始められがちなのである。

いずれにせよ、上位グループほどクラブ活動や学校行事という「学校内の活動」に熱心に取り組み、下位グループほどアルバイトという「学校外の活動」に熱心に取り組んでいる。

さらに、「髪の毛を染める」「タバコを吸う」「先生に反抗する」といった行為との関係を見ると、「髪の毛を染める」割合(「よくする」「たまにする」)は、上位四一・五%∨中位四八・一%∨下位五五・四%、「タバコを吸う」割合(同)は、上位一三・四%∨中位一三・八%∨下位二四・七%、「先生に反抗する」割合(同)は、上位二七・九%∨中位二八・〇%∨下位三一・五%と、い

ずれも下位グループで高くなっている。学校的価値からは「逸脱的」とみなされがちなこれらの行為を「よくする」「たまにする」割合は、いずれも下位グループほど高くなっているのである。

授業内容を理解できず、信頼できる教師もいないという、学校における周辺化状態に加えて、あるいはそれを原因もしくは結果とする形で、少なくとも高校段階になると、文化階層下位グループでは学校での生活、学校的価値からの離脱傾向が見られるようになる。

4 保護者のコントロールと進路相談

保護者が調査対象者に寄せる期待や具体的な働きかけにも、文化階層による違いが見られる。「あなたの保護者は、あなたに対してどのように接し、どんな期待をしていますか」と尋ねた結果と文化階層との関係を見ると、「あなたの日ごろの生活態度について、注意する」「あなたの将来について、話をする」という二項目で差が見られた。

「(保護者は) あなたの日ごろの生活態度について、注意する」割合(「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」は上位六九・〇%▽中位五八・五%▽下位五三・八%、「(保護者は) あなたの将来について、話をする」割合は

上位七六・三%▽中位六六・九%▽下位五三・六%と、いずれにおいても下位グループほど低くなっている。これらは、保護者の子どもに対するコントロール、方向付けの弱さ、あるいはそれらの機能不全を表していると考えられる。「保護者に無断で外泊する」について「よくする」「たまにする」と回答する割合が、上位一二・九%△中位一六・六%△下位二一・五%と、下位グループほど高くなっていることも、こうした傾向を傍証している。

こうした指摘は、「文化階層下位グループの親は、子どもをほったらかしにしている」との非難へと容易につながりかねない。しかし、かわろうと思ってもかわれない、願おうと思っても願えない状況が文化階層下位グループの保護者により顕著に見られることは十分予想できる。進路多様校では、一人親世帯や両親ともいない生徒が相当数含まれている。調査対象となったある進路多様校の教員によると、生徒の三分の一から半数程度が、一人親であるか両親ともいない生徒であるとの話もあつた。一人親である場合、子どもに寄せる期待・働きかけの絶対量は、両親ともいる者に比べ低くなってしまいがちであろう。そして、そうした進路多様校に相対的に多く通っているのは文化階層下位グループの生徒なのであ

る。一人親世帯や両親ともいない世帯、こうした家族のありようについては、今回の調査では把握できてはおらず、詳細な検討はできないが、下位グループに見られる保護者の子どもに対するコントロール、方向付けの弱さ、機能不全を、保護者の非難へと短絡できないことは確かである。

いずれにせよ、文化階層下位グループで見られる、保護者の子どもに対するコントロール、方向付けの弱さ、あるいは機能不全、そして、小学校段階から高校に至るまで一貫している信頼できる教師の不在、これらの結果として、「進路について相談できる相手がいなかった」について「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答する割合は、上位二一・三%、中位二九・五%、下位三七・二%と下位グループほど高くなっているのである。

四 文化階層と高卒後の進路分化

これまで記述してきた、文化階層下位グループの現在までの生活史は、次のように整理できる。彼／彼女らは、(一) 小学校の段階で既に授業内容が分からず、信頼できる教師もいないという、学校における周辺化状況に置かれる。(二) 中学段階でもそうした状況は継続し、(三)

高校進学の段階で、文化階層上の位置に対応した高校にふり分けられていく。(四) 高校生活においても学校における周辺化状況は継続し、(五) 学校からの離脱を食い止める親・教師のコントロールは弱く(あるいは機能不全状態にあり)、生育家族の経済状況が(アルバイトという形で)学校外での生活に重心を移動させることもあり、学校からの離脱傾向が見られるようになる。

このようなプロセスを経て、また親や教師の進路についての方向付けの弱さ・機能不全の結果として、高校三年生段階で示される高卒後の進路予定は次のようになる(図9)。

高校卒業後の予定進路が「進学」の割合は、上位七四・三%、中位六六・一%、下位四八・八%と上位グループほど顕著に高くなっている。一方、「就職」の割合は上位一八・八%、中位二〇・五%、下位三三・四%、「フリーター」の割合は上位六・九%、中位一三・五%、下位一七・八%と、下位グループほど高くなっている。高校卒業時の進路分化に、生育家族の階層的背景が大きな影響を持つていることを見てとることができる。³⁾

また、「進学」予定者の予定進学先を見ると(図10)、「四年制大学」の割合は上位四八・六%、中位四一・六%、下位三四・六%と上位グループほど高く、「専門学校」

図9 文化階層と予定進路

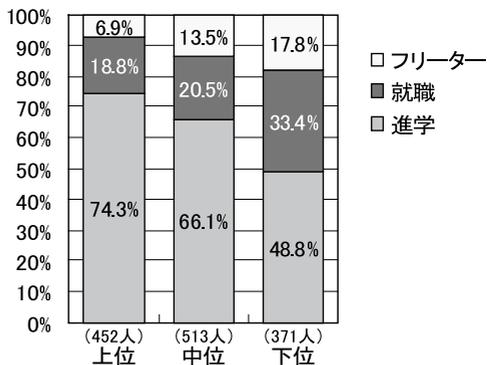
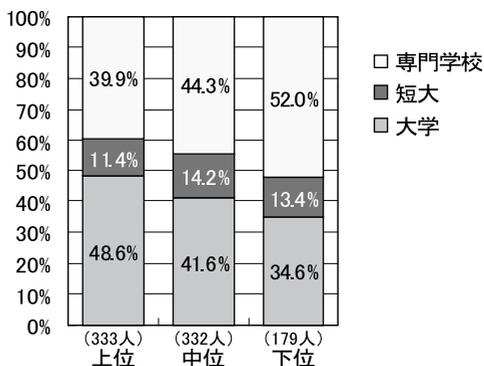


図10 文化階層と予定進学先



の割合は上位三九・九%へ中位四四・三%へ下位五二・〇%と下位グループほど高くなっている。

おわりに

「大阪フリーター調査」で見いだされたフリーター析出のプロセス——生育家族の困難が低学力・低学歴という形で若者自身の困難へと変換／移転され、不利が不利

を呼ぶ形で困難が重層化し、フリーターとして析出される、不平等の世代間再生産のプロセス——が、これまでの文化階層と進路分化の検討においても確認された。

ただし、文化階層によって有意な差異が見られるのは、進学か否かであって、非進学層（「就職」「フリーター」）を取り出し、文化階層との関係を見ても有意な差は見られない。「生家の暮らし向き」家の人は大学を出ているか」といった他の階層指標で見ても同様である。非進学層の就職かフリーターかという進路分化は、本調査で把握できたこれら階層指標によつては十分説明することはできない。とはいえ、一九九二年には三倍を超えていた求人倍率（全国）が、二〇〇四年の調査時点では一倍を切るまでに落ち込んでおり、そうした状況において、非進学という進路を選択する、あるいは選択せざるを得ない者の一定数がフリーターとして析出されるのは半ば必然である。その意味でフリーターの析出において生育家族の文化階層が大きな影響を持っていることは確認されるべきであろう。

注

(1) 例えば西田（一九九六）。

(2) こうした傾向に対応する形で、高校時代のアルバイト経験率は、上位六六・二％ \wedge 中位七八・一％ \wedge 下位八二・七％と下位グループほど高く、下位グループにおける経験率は八割を超えている。また、平均アルバイト期間も、上位・中位グループの一七ヵ月に対して、下位グループでは二〇ヵ月に及んでいる。

(3) 高校タイプ別に文化階層と進路予定との関係を見ると、一貫した傾向とは言い難い、ズレも見られるのであるが、おおよそ下位グループで「進学」割合が低く、「就職」「フリーター」割合が高くなるという傾向を見いだすことができる。

文献

荻谷剛彦（二〇〇四）『学力』の階層差は拡大したか」荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学——調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店。

妻木進吾（二〇〇五）「本当に不利な立場に置かれた若者たち——フリーターの析出に見られる不平等の世代間再生産」部落解放・人権研究所『排除される若者たち——フリーターと不平等の再生産』解放出版社。

西田芳正（一九九六）「不平等の再生産と教師 教師文化における差別性をめぐって」八木正編『被差別世界と社会学』明石書店。

部落解放・人権研究所編（二〇〇五）『排除される若者たち——フリーターと不平等の再生産』解放出版社。
部落解放・人権研究所編（二〇〇六）『フリーター選択の構造と過程——「高校生の生活と進路意識調査」報告書』。